

設楽発掘通信

No.43
平成30年
12月号

滝瀬遺跡の地元説明会を行いました

冬を迎え、寒さが身に染みるようになってきました。今年度の設楽ダム事業に発掘調査の方もいよいよ佳境を迎えています。

去る十一月十日（土）には、八橋地区の滝瀬遺跡で地元説明会を開催しました。説明会当日は見事な秋晴れのもと、三十名の見学者を迎えることができました。参加された皆さんにとっては、境川をのぞむ丘陵の南向き斜面にある一八B区のすばらしい立地環境が印象に残ったのではないのでしょうか。また、一八B区で見つかった九千年前、縄文時代早期より古い竪穴建物の跡などを身近に見ていただくことができ、これだけ古い縄文時代の集落が設楽町内で初めて見つかったことに驚いた見学者の方もいました。

また、遺物展示では、精巧な文様が刻まれた石刀（一八C区出土）や、黒曜石製の刃器（一八B区出土）に魅せられ、思わず感嘆の声を上げる方もいました。滝瀬遺跡では地元説明会後も新たな発見が相次いでいますので（二頁を参照）、最後まで発掘調査からは目が離せないことになりそうです。（愛知県埋蔵文化財

センター 早野浩二



写真1 出土遺物の展示



写真2 滝瀬遺跡の地元説明会

石原遺跡の調査

石原遺跡では、調査区の西半分（十八B区）の調査を完了し、残るは埋め戻しの完了を待つのみとなりました。空撮後に行われた補足調査では、非常に大きな成果が得られました。

十八B区の中央やや南地点にて、前号で紹介しました竪穴建物跡（一七〇SⅠ）の真下から、それよりもはるかに大きく、立派な石囲炉と柱穴を有する竪穴建物跡（三二五SⅠ）が新たにみつかりました（写真3）。出土した土器から、この遺構は縄文時代中期前半（約五千五百年前）のものと考えられます。

平面は円形で、直径約七・八mを測ります。これは一般的な竪穴建物跡の規模に比べて大型といつてよい大きさで、大人が六人、横一列になって掘削作業をしても余裕があるほどでした（写真4）。また、遺構がみつかった地面から床面までの深さは最深で約〇・五mを測ります。竪穴の深さは、一般的には〇・五m程度までの例が多いとされていますので、本地点は後世の削平をそれほど受けておらず、調査面も当時の地表面に近いのかもしれない。



写真3 325SI 南西から



写真4 325SI 掘削作業風景 北西から

床面からみつかった柱穴は八基を数え、中には柱痕跡と考えられる穴まで残っているものもありました。また壁際に廻る溝などの断面観察から、本建物には少なくとも新旧二段階の時期が存在することもわかりました。溝の位置は変わらないことから、建物自体の規模は変わらず、建て替えなど連続した利用が想定されます。

建物中央の石囲炉は、花こう岩と片麻岩を方形に配して構築されていました（写真5）。一辺が約〇・七mを測り、炉石の内面は被熱による赤色化が認められました。炉石を完全に露出させたところ、三辺が二重に組まれた状態であることがわかりました。上から順に炉石を外していくと、外側の石も方形に組まれており、石の内面はしっかりと被熱を受けていました（写真6）。このことから、炉自体も使用に伴って若干の造り替えが行われており、この建物が一定期間使用され続けたことがうかがえます。

石原遺跡は、砂地に立地する遺跡です。粘性土壌と比べるとどうしても崩れやすく、住居を構築するには不向きではないかと考えられました。しかしながら、現実にはこのような大型の建物を構築して人々は生活していました。目の前に流れる境川と周囲の山々、南に開けた緩斜面は、食料資源獲得や日照など様々な条件から、やはり住居を構築るにあたって絶好の立地環境だったと考えられます。



写真5 石囲炉 (330SL) 真上から



写真6 造り替え前の石囲炉 (330SL) 南西から

滝瀬遺跡の調査

滝瀬遺跡では、調査区西側の十八A区で遺構検出をおこなっています。また、調査区中央の十八B区の上半分にあたる十八Ba区の調査がいったん完了したため、空撮を行いました（写真9）。

十八B区では、縄文時代草創期後葉から早期前葉（約一万二千年前から約九千年前）の竪穴建物跡（写真7）が十基みつかりました。写真8の人が立っているところが竪穴建物跡になりますが、それらは同時に建っていたのではなく、1、2棟ずつ建っていたと考えられます。竪穴建物跡の平面形状は円形で、浅鉢状に掘り込まれています。炉跡や柱穴は、今のところみつかったものではありません。竪穴建物跡からは、縄文土器片や石鏃、台石、磨石、剥片などが多く出土しています。

十八B区その他の遺構は、集石遺構、土器を敷いた遺構（八三七SU）がみつかっています。八三七SUの土器は、縄文時代後期（約四千四百年前）のもの（安西工業株式会社 高木祐志）



写真7 竪穴建物跡 830SI (南西から)



写真8 18B区竪穴建物群 (西から)



写真9 18A・B区全景 (真上から・北が上)

延坂の古道

設楽町川向地区には、国土地理院の地形図に「延坂」と図示されている細い道があります。それは、上ヲロウと延坂の各集落を發し、「瀧ッボ川」で合流するとその谷筋に沿って登り、名倉地区との境界にあたる市場口に至る約二・七kmの道のりです。「延坂」は、今ではほとんど使われていない古道ですが、地元の方によると、以前はこの道を登って市場口付近にある田畑へ耕作に通ったそうです。さらに明治時代の地籍図によると、道は今より東側の斜面をつづら折りに登って尾根筋に至るルートで、名称も「ヲロウ道」と記されています。一方、川向山西側の戸神川沿いには、今の国道二五七号に相当する道があり



図1 川向山の東西にある道(昭和27年(1952年)愛知県作成の地形図を改変)



写真10 延坂の古道
(上ヲロウ付近、2016年撮影)

ています。これに対し「延坂」に相当する道には名称が記されていません。

このように、江戸時代以降の「延坂(ヲロウ道)」は「みの道」とは対照的な扱いですが、地形図をみると、川向山南麓では戸神川と境川の二つの流域に遺跡が集中しており、戸神川流域の一群は「みの道」で、境川流域の一群は「延坂」で、ともに市場口から名倉そして東濃や信濃方面へとつながっていたと推測されます。現在調査中の遺跡ではこれら中部高地にルーツをもつ遺物が出土しており、中世以前の段階では「みの道」と「延坂(ヲロウ道)」はともに文化をつなぐ役割を果たしていたものと思われます。

(愛知県埋蔵文化財センター 永井邦仁)

設楽発掘通信

No.43 平成30年12月号

編集・発行

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24

電話 (0567) 674161【管理課】 4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力

安西工業株式会社